

私共の実験により10ヶ感染せしめた群に於て100%に1ヶ以上は感染せしめたと思はれ、且つ5ヶ以上 Miracidium が侵入したと考えられるのが大多数であつたが、15週後に貝を圧潰してみるに19.91%と云ふ低率であつたことは菊地の実験の如く、簡単なる操作にて感染貝を得ることは不可能と考えられる。

感染 Miracidium の多寡により貝の寿命に変化を来し、生殖能力に変化あることは大田が指摘しているが、私共の実験にて15週間後の圧潰成績にては1ヶの感染群と10ヶ感染群とはかえつて后者の方が生存率は良好であつた。しかし10ヶ感染群は悉く10ヶ侵入したのではないので、この問題は更に詳細な実験を重ねる必要があると考える。

宮入貝432ヶを圧潰し2ヶに Cercaria Okabei が発見されたが、これらは岡部の記載の宮入貝採取場所と殆んど同じ場所と考られる。即ち現在の甲府市山梨大学運動場附近にて採取したものであつた。

1ヶの宮入貝に1ヶの Miracidium が侵入した場合、Cercaria 数は何ヶ生ずるか、菊地は大体100~500と記載しているが、私共の試験では未熟、成熟 Cercaria 合せて、3ヶの感染貝を検査したるに221、758、929であつた。これは飼育方法により發育速度は異なるが、私共は室内にて15週後に検査したので未だ母 Sporocyst の状態にて体内中にあることも考慮する必要があると思はれる。

#### 結 語

- 1) 小型シャーレ(直径2cm)に蒸溜中、室温、18~21°Cにて Miracidium 1ヶに宮入貝1ヶを24時間作用せしめ206ヶ中10ヶ(4.9%)の感染貝を得た。
- 2) 同様の条件にて Miracidium 10ヶを作用せしめ、226ヶ中45ヶ(19.91%)の感染貝を得た。
- 3) 外見上10ヶ中1ヶ以上の Miracidium を感染せしめたと思はれる貝でも、感染率は19.91%であつた。
- 4) 甲府市山梨大学運動場附近にて採取した宮入貝に432ヶ中2ヶの Cercaria Okabei の寄生をみた。
- 5) 1ヶの Miracidium を1ヶの宮入貝に感染せしめ、生じた未熟、成熟 Cercaria 数は221、758、929、であつた。

文 献 省 略

## 16. 各種駆虫剤による蛔虫及び鉤虫の駆虫実験

大 田 秀 浄

#### 緒 言

昭和29年4月1日より昭和30年3月31日に至る1年間に山梨県甲府市周辺の住民で、本所外来を訪れた蛔虫及び鉤虫保有者の個人駆虫及び所外での集団駆虫を各種駆虫剤により実施したのでその成績を報告する。

被検駆虫薬、検便方法、駆虫成績は省略。

### 総括及び考按

1) 蛔虫の個人駆虫例はサントニン、海人草精製エキス、アスカリドール製剤の三種の薬剤の分服により69.6%の虫卵陰転率を得た。又1回頓服より2回分服が効果があり、副作用の軽減にも意味があると考えられる。

2) 7~8才の学童の蛔虫の集団駆虫例は、単剤にては新パトールが72.4%、2種併用にてはサントニン0.04g、マクニン末1.0gの併用が77.8%、マクニンS2錠が73.4%、ネマシン3錠が80.0%三種併用にてはサントニン0.04g、マクニン末0.5g、アスキス1球併用が78.5%、マクニンS1錠、ネマシン3錠併用が77.8%の虫卵陰転率を得た。各れも午前10時服薬させ、副作用も学業に支障を来さず、虫卵陰転率ののが高いことは集団駆虫薬として効果があると考えられる。但し、アスカリドール製剤は低学年には服薬の難及び服薬後の臭気による頭痛、嘔気を訴える者が少数例あつた。

3) 学童に強力エキサント3錠の集団駆虫例は2.4.5.6年に於て62.5%の虫卵陰転率を得た。副作用として頭痛・腹痛・下痢を主に訴えたが学業に支障は来さなかつた。

4) 学童にマクニンSの集団駆虫例は1錠服薬の1.2年は50.0%、2錠服薬の3.4.5.6年は、80.6%の虫卵陰転率をみた。副作用として33.3%に何らかの副作用を訴えているが、大部分は学業に支障を来さなかつた。♯が少数例にあつたが、学童である為本剤の為か否か疑はしい。

5) 学童にネマシンの集団駆虫例は2錠服薬の1年40.0%、3錠服薬の2.3.4.5年は82.9%、4錠服薬の6年は89.5%の虫卵陰転率を得た。副作用を訴えた者が60.9%もあり、特に頭痛5例、めまい、悪心各々1例あるが本剤の為と考えられる。以上3種の駆虫剤の内、副作用少く駆虫効果の高いのはマクニンSと考えられるが、虫卵陰転率からはネマシンが好結果を得た。

6) 鉤虫の個人駆虫例はテトレンを1回投与による虫卵陰転率は29.6%で、四塩化エチレンの駆虫率を田村・沢田は45.5%、小宮等は23.3%、永井は39.0%、松林は20.7%と報告しているが、本実験に於ても低率であつた。副作用は81.5%の何らかの訴えをしており、酒酔感は59.1%に高率であつた。これらは小宮・松林の報告と同様な結果を得ている。

7) 少数例であつたがテトレンを2クール又は3クール服薬することにより55.5%で、小宮等は2回駆虫にて28.6%、3回駆虫にて50.0%、藤沢は2~3日反復駆虫にて83.0%の駆虫率を報告しているが、2~3日連続反復駆虫は心・肝・腎に悪影響を及ぼす恐れがあるので2~3週間の間隔をおいて駆虫を実施したが、1回駆虫よりも勿論虫卵陰転率は良好であつた。副作用は88.9%に何らかの訴えをしており、且つ酒酔感は87.5%の高率であつた、嘔気、嘔吐は硫苦によるものが大部分であつた。

8) テトレンとオーミン、アスキスの併用は少数例であつたが好結果は得られなかつた。

9) オーミンを1.0g宛分服投与の場合、全量10.0g投与しても41.2%の虫卵陰転率で、1回に1.0g宛分服投与よりも毎就寝前3.0g、2.0g、1.0gと1回の服薬量を増量して服薬せしめた方が虫卵陰転率は高いものと考えられる。又、1.0g宛投与の場合4.0g~10.0gを1クールとして3~4週間の間隔をおいて服薬し、2クールをなすことにより好結果を得ると考える。又1回1.0g投与では服薬し易く、副作用も殆んど訴えなかつた。

10) 12指腸ゾンデにより3例にオーミン 3.0gで全例虫卵陰転の成績を得たが、岩田等は6/6、更田等は1/1、麻生等は4/4に全例完全駆虫に成功している。オーミンの12指腸ゾンデによる駆虫は好成績を得るものと考ええる。

11) 17才～65才までのテトレンによる村民の鉤虫集団駆虫は、前夜予備下剤と服薬后下剤を使用し、40.7%の虫卵陰転率であつた。

12) 市内学童のテトレンによる鉤虫集団駆虫は、当日予備下剤を投与して駆虫し95.0%、当日予備下剤を投与せずに駆虫し80.0%の虫卵陰転率で、予備下剤を使用した方が好結果を得た。副作用は前者は50.0%、後者は53.3%と同様であつた。テトレンと新ネマトールの併用は50.0%の虫卵陰転率であつた。

13) 市内高等学校学生のテトレンによる鉤虫の集団駆虫は、前夜予備下剤と服薬后下剤を投与して駆虫し78.8%の虫卵陰転率であつた。副作用は女子であつた為か100%に何らかの訴えがあつた。村民の集団駆虫例に於て虫卵陰転率に開きがあるのは虫体数を調査しなかつたので不明であるが、感染虫体の多寡に関係しているのではないかと考えられる。又、鉤虫の種類は甲府盆地に於ては95.1%にツビニ鉤虫を佐々木等は認めている。副作用は特に女子に於ては訴えが多いので、服薬量を考慮して投与する必要がある。

#### 文 献 省 略

(本論文の詳細は東京医事新誌第72巻第7号に掲載。)

## 17. 農村学童の蛔虫反覆集団駆虫と感染状況について

大 田 秀 浄

山梨県甲府市の北方北の手にある主に農家より通学し、学園の環境は田畑にて囲まれたる学童の低学年を対象に蛔虫の毎月集団検便駆虫をなし、年間に於ける蛔虫の感染状況を知ると共に、各種駆虫剤による感染効果を知らんととして昭和28年7月より1年間観察した。

#### 実 施 方 法

小学校生徒2年生男女59名を対象に昭和28年7月より毎月1回検便と各種駆虫剤による駆虫を実施した。1年間に13回の検便と12回の駆虫を実施した。検便は厚生省指示の塗抹法により、駆虫後の検便は3週間後に実施し、陽性者には検便後7日～10日の間に学校にて集団駆虫を行つた。

#### 実 験 成 績 省 略

#### 結 語

- 1) 毎月反復駆虫をなすことにより1年后に陽性者を36名(61%)より12名(20.3%)に減少せしめ得た。
- 2) 毎月反復駆虫をなすことによる継続陽性者は3ヶ月より0となすことを得た。
- 3) 新感染者は1名(2.8%)～3名(8.3%)に過ぎなかつた。